

世 界 史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

次の詩は、11世紀中国の文人である欧陽脩が作ったとされる「日本刀歌」の抜粋である。この詩は A 貿易の一面を物語る作品として名高い。原文の訓読を挙げたうえで詩の内容を見ていこう。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ①宝刀 近ごろ出ず 日本国 | 越賈 之を得たり 滄海の東 |
| ②魚皮もて装貼せし 香木の鞘 | 黄白の閑り雑れる 鏹と銅と |
| ③百金もて伝入す 好事の手 | 佩服すれば 以て妖凶を禳うべし |
| ④伝え聞く 其の国は大なる島に居り | 土壤は沃え饒かにして 風俗好しと |
| ⑤其の先 徐福 秦の民を詐り | 薬を採り 淹留して 舂童老いたり |
| ⑥百工・五種 之と居り | 今に至るまで 器玩 皆精巧なり |
| ⑦前朝には 貢を献じて 屢しば往来し | 士人は往往にして詞藻に工なり |
| ⑧徐福行きし時 書未だ焚かず | 逸書百篇 今尚お存す |
| ⑨令は厳しくして 中国に伝うるを許さず | 世を挙げて 人の古文を識るものなし |
| ⑩先王の大典 夷貊に蔵れ | 蒼波 浩蕩として津を通ずるなし |
| ⑪人をして感激して坐ろに流涕せしむ | 鏹 洩たる短刀 何ぞ云うに足らんや |

詩では11世紀の中国で日本刀が珍重されたことがまず述べられる。最近、日本から素晴らしい名刀が出回っているが、その名刀は市舶司が置かれた B 州・杭州（共に現在の浙江省）を中心とする江南の商人が日本で買い求めて中国にもたらしたものであり（①）、その日本刀は武器というよりも工芸品として重視されていて（②）、百金をはたいてでも手に入れる好事家もいて、邪気払いの効用も期待されていた（③）と言う。

そこから、欧陽脩は日本の国の成り立ちや、文化・工芸が発達した理由を考察し

ているが、それはいかにも中華帝国の知識人らしい発想を示している。すなわち、秦の始皇帝の時代に、徐福という人物が子供や技術者を率いて不老長生の薬を求めて旅に出て、そのたどり着いた先が日本であり、その子孫が日本人となって中国の技術を継承したと言う（④～⑥）。

興味深いのは、⑦で「前朝」の時代に中国に來貢した日本の士人が文章能力に秀でていたことを記している点である。歐陽脩は歴史家としても著名で、その「前朝」の正史^{〔1〕}を編纂しているのも彼である。その正史の東夷伝・日本の条では、光孝天皇までの歴代天皇の概略と、彼らが「前朝」に派遣した **C** 使について述べている。そこでは、**C** 使らが自国の優勢を誇張し中国人から不審に思われたこと、使節の一人である栗田真人が容姿典雅・好学にして文筆の才があったこと、王朝からの賜り物をすべて書籍代に費やし、船に満載して帰国したこと、さらに、**D** の治と称される玄宗の治世に來航した **E** が「華を慕いて」帰国せず皇帝に重用されて安南都護に昇進したことや、桓武天皇が空海や橘逸勢といった文化人を派遣したことを述べている。⑦に述べられた日本士人の姿は、歐陽脩が歴史研究によって得たところの、中華に憧憬^{しょうけい}する日本知識人の事績を踏まえているわけである。

そして、詩の末尾に至ると歐陽脩の本心が歴然と現れる。徐福が日本に旅立った時期は始皇帝による焚書・**F** 以前であるので、中国で失われた儒教の基本文^{〔2〕}献が日本には残存していること、中華の偉大な典籍が夷狄の住む地に秘蔵されているにもかかわらずそれを中国の知識人が閲覧することができないこと、そのことは人々の胸を高ぶらせ何ということなしに涙を流させるものであることを述べている。その上で、これに比べれば日本刀ごときは取るに足りないと切って捨てているのである（⑧～⑪）。

要するに、工芸品としての日本刀の精緻さを称えるかのごとく始めた「日本刀歌」は、中華文明の粹である儒教の基本文献が見舞われた厄災の歴史と、それが蛮族に隠匿されている現状に対する悲憤慷慨をもって終わるのである。結局のところ、この詩の主題は武器よりも文なのであって、武力によらず、文官優位の国家体制を構築し、**G** 主義を標榜する当時の王朝のエリートにふさわしい作品といえよう。

時代は下って1880年、清の駐日公使館員として来日した楊守敬は多数の貴重な漢籍を収集した。彼は、その成果として『日本訪書志』・『古逸叢書』といった書物の刊行に尽力し、中国で滅んでしまった典籍を本国中国に逆輸入した。当時、日本は欧化思想に染まり漢籍に対する関心が失われていたことが、彼による大量の書籍購入に幸いした面もある。楊守敬による漢籍の逆輸入によって欧陽脩の無念は幾ばくか晴らされたことだろう。日本の立憲君主政治を模範とする H の変法を後に推進しようとした光緒帝の治世の出来事であった。

〔1〕 正史の叙述形式を何体というか。

〔2〕 次に挙げる儒教の基本文献のうち「五経」に含まれないものはどれか。該当するものの記号をすべて記せ。

(ア) 易経

(イ) 詩経

(ウ) 春秋

(エ) 書経

(オ) 孟子

(カ) 礼記

(キ) 論語

Ⅱ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

19世紀半ばにキリスト教の影響を受けて上帝会を創始した洪秀全は、当時の王朝である清に反旗をひるがえし太平天国を樹立した。すべての人は上帝のもとに平等であるとし、 A の廃止、妓女（中国における遊女・芸妓）・売春・蓄妾（めかけを囲うこと、また、囲われためかけ）の禁止、労働・土地分配・教育における男女平等といった政策を打ち出した。また、隋の B 帝が創設し清朝末期まで用いられた官僚の登用試験である科挙を女性に対しても実施した。こうした施策は、近代中国における女性解放の嚆矢として、とりわけ、中国共産党によって高く評価された。

A は唐末に始まったとされ、幼女の足指を折り曲げ布を巻き付けることにより足を小さく整形する奇習で、これにより女性は日常生活において決定的な不自由を強いられた。こうした奇習を禁止したことは確かに評価されるべきであるが、太平天国の思惑は、女性を兵士として戦闘に参加させることにあったとされる。そして、太平天国は、現在の C を首都に定めた後、女子に対して伝統的な娘・妻・母としての道を教えるようになる。

他方、 A 廃止の議論はその後の中国社会においても継承される。アヘン戦争や太平天国を契機にヨーロッパの近代技術の導入を目指した D 運動の推進者やキリスト教宣教師と親交のあった鄭観応は、 A の廃止と女子教育の振興を説いた。つづいて、康有為や梁啓超などが「男女平等」の用語を広めつつ女性解放運動を進めていく。ただし、彼らの議論は、国家や民族を保持する思想と国民を生み育てる女性の役割とを結び付けた女性論であり、いわば良妻賢母主義の枠組みに留まるものであった。

こうした男性による女性解放の議論は、やがて、20世紀初頭に女性の海外留学が増大したように、女性自身の行動を促していく。1904年に単身訪日した秋瑾^{しゅうきん}は、留学を通じて中国の前途に危機感を抱き、革命の宣伝に携わるようになる。いみじくも、翌年、革命運動の拠点を日本に移した孫文が東京で革命組織である E を設立すると、彼女は最初的女性会員のひとりとなり、のちに、革命運動のなかで壮絶な最期をとげる。

女性の革命運動への参加は女性兵士を誕生させた。中国国民党が各地の軍閥を打

破し中国を統一するために組織した **F** 軍には女性軍が創設された。また、同時期には、中国共産党の軍隊でも女性兵士が誕生している。国民党の攻撃を受けるなかで、約12,500キロの困難な行軍を成し遂げた **G** においても、2,000名あまりの女性兵士が参加したという。彼女らの中には、秋瑾がそうであったように、女性の解放・男女平等の証しとして女性兵士になることを選択した者が多かったが、他方で、家や親が決めた結婚から逃れるために軍隊に参加した女性も少なくなかったと言われる。すなわち、当時の女性の理想には、男性と同様に革命に身を投じる姿だけではなく、自由な恋愛と結婚、その先の近代的な家庭を築く姿もあった。そして、そこには蓄妾や女性だけに貞操を求める旧来の封建的な観念への批判が包含されていた。

胡適は羅家倫とともに新文化運動を推進した啓蒙雑誌『新青年』において、ノルウェーの劇作家イブセンの代表作である『**H**』を翻訳し、女性主人公のノラが目覚めと家庭からの解放を通じて、自立した人間として生きる女性の姿を紹介した。さらに、魯迅は、「ノラは家を出てからどうなったのか」と題する講演をおこない、経済力を持たない女性は家を出ても墮落するか家に戻るしかないとし、自由な恋愛・結婚を主体的に実現するための経済的な自立を説いた。経済的な自立がなければ、妓女や蓄妾の境遇に陥ってしまう。胡適や魯迅も娼妓を論じていたが、1930年代には上海だけで十数万人もの妓女がいたとされ、日本軍の統制下において強制的に **I** 婦にさせられた妓女も少なくなかった。

さて、女性の自立が重要な課題となった背景には、当時の中国社会における多様な思潮の影響があった。この潮流のなかで、中国共産党は女性の社会的労働を女性政策の基本とし、1931年に **J** で中華ソヴィエト共和国臨時政府を樹立した際には、女性の離婚の自由を規定した条令も制定した。そして、中華人民共和国の建国後には女性の労働参加を全面的に進めた。また、建国の翌年には、婚姻の自由・一夫一婦制・男女平等の精神がうたわれ、旧来の婚姻制度や封建的な家制度を否定した。さらに、建国から約10年がかりで大規模な娼妓運動を展開し、妓女の就業・生活問題の解決を図った。

しかし、現在の中国社会とりわけ農村においては家父長制が依然として存在しており、また、市場経済化のなかで、個人の自由が認められる一方で性別分業が拡大するなど、女性の権利をめぐる課題は今なお残されている。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

13世紀から17世紀にかけてのインド亜大陸においては、イスラーム政権をはじめとした様々な王朝が成立し、そのことが政治情勢や文化に様々な影響を与えた。

14世紀初頭以降、デリー＝スルタン朝と総称される5つの王朝のうち、2番目の王朝である A 朝と3番目の王朝であるトゥグルク朝が南方へ進軍した。当時の南インドでは諸勢力が相争っていた。そうしたなか、ヒンドゥー政権であるパーンディヤ朝が、タミル人によって9世紀に再興された B 朝を滅ぼすことに成功したものの、 A 朝の侵攻で衰退した。南インドの混乱は、その後、イスラームを奉ずるバフマニー朝とヒンドゥー教を奉ずる C 王国の成立によって終止符が打たれた。

16世紀に入ると、中央アジア出身のバーブルが北インドへ進出し、デリー＝スルタン朝の5番目の王朝であるロディー朝の軍を破ってムガル帝国を建国した。帝国の実質的な確立者とも言われる第3代皇帝である D のもとでムガル帝国は飛躍する。彼は官僚に官位を与え、それに応じて保持する騎兵・騎馬の数や給与を定めた E 制によって支配階層を組織化し、綿密な調査にもとづいて徴税を行うなど、中央集権的な体制を築いた。さらに、 D は非ムスリムに課す人頭税を廃止したり、ヴァルダマーナによって創始された不殺生主義の F 教をはじめとした他宗教に関心を示したりした。

第6代皇帝の G は帝国最大の版図を実現した。しかし、彼がヒンドゥー教の寺院を破壊し、廃止されていた人頭税を復活させたため、ヒンドゥー教徒の反発を招くと同時に農民反乱も生じた。加えて、17世紀半ばにシヴァージーが建てたインド西部の H 王国や、インド中西部に定住して小王国を築いていた戦士カースト集団であるラージプート、強大化したシク教徒などの抵抗も受けた。 G が18世紀初めに亡くなるとムガル帝国は衰え、各地の地方勢力が独立していくこととなる。

この時期、インドはヨーロッパ諸国と直接的に接触するようになる。ポルトガルは1498年のカリカット到達以降、胡椒の産地を後背地に有するインド南西部のマラ

バル海岸への進出をはじめた。また、南インド・東南アジア間で綿布と香辛料が往来していることに着目し、マレー半島西岸の港市である [I] を占領するとともに、インド南東部のコロマンデル海岸に拠点を築いた。また、1510年にはインド西岸の港市 [J] に達する。 [C] 王国は [J] を拠点とするポルトガルと友好関係を保ち、アラビア方面からの軍馬の補給を確保した。しかし、ポルトガルの優勢はムガル帝国と衝突したこともあり長くは続かず、17世紀にはオランダとイギリスに取って代わられた。

宗教においてもこの時期に新しい動きが見られた。ヒンドゥー教の最高神への絶対的な帰依を目指す [K] 運動は7世紀に南インドから広がり、14世紀以降、北インドにも及んだ。16世紀には、 [K] 思想とイスラーム神秘主義を融合し、偶像崇拜やカーストの差別に反対するシク教が、クシャトリヤ階層出身である [L] によって創始された。

また、インドを代表するいくつかの建造物が建設されたのもこの時期であった。13世紀には、奴隷王朝の創始者であるアイバクがインド最古となる大モスクをデリー南方に建設した。^{〔1〕} 17世紀には、インド北西部のパンジャーブ地方にシク教徒の総本山であるハリマन्दル=サーヒブや、ムガル帝国の第5代皇帝である [M] によってインド=イスラーム建築の代表例とされるタージ=マハルが、それぞれ建てられた。さらに、 [C] 王国の首都であった現ハンピには、14～16世紀につくられた建築物群が残されており、1986年にユネスコの世界遺産に登録された。この [C] 王国の首都の都市プランは、王を叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公ラーマ^{〔2〕}になぞらえて、その世界を再現するように造られたと言われる。

〔1〕 この最古のモスクに付属する塔を何というか。

〔2〕 『ラーマーヤナ』と並び称されるサンスクリット語で書かれた叙事詩で、北インドを舞台とした戦争物語を中核とする作品を何というか。

Ⅳ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

フランスの歴史において「革命」と称される出来事は複数存在する。もっともよく知られる最初の「革命」は、バスティーユ牢獄襲撃をきっかけに1789年に始まったフランス革命である。国民議会に集った議員たちは、封建的特権の廃止や「人権宣言⁽¹⁾」の採択を通じて身分制度を切り崩し、1791年にフランス初の憲法を定めた。ところが、こうした動きに民衆は必ずしも満足していなかった。この憲法は納税額に応じて市民を区分しており、すべてのフランス市民に参政権を与えたわけではなかったからである。そこで、民衆たちは国王一家の暮らす 宮殿を襲撃する8月10日事件を起こして王権を停止させると、男子普通選挙によって国民公会を成立させた。しかし、民主主義の広がり社会の安定ではなくロベスピエールを中心とする恐怖政治をもたらすと、再度、民衆の政治参加は制限されていくことになる。最終的に、ナポレオンが第一 を務める 政府が発足し革命の終結が宣言されると、フランスは権威主義的な体制へと回帰していった。

次いで、1830年には七月革命が起こった。ナポレオンの失脚後、フランスでは再び 家出身の国王が君臨していた。国王シャルル10世は1830年に議회를強引に解散し、選挙制度の改定などを進めようとした。これに対抗して新政府の樹立を目指したのが七月革命である。フランスのロマン主義を代表する画家 が描いた「民衆を導く自由の女神」はこの七月革命を題材としたものである。ただし、七月革命の主導者たちは以前のように革命が急進化することを恐れていたため、新国王として を担ぎ出し王権を維持するとともに、制限選挙制を導入した。その結果、民衆の間には再び新体制に対する不満が募り、七月革命の直後から立て続けに民衆蜂起が起こった。一連の蜂起のなかで、1832年6月にパリで発生した民衆蜂起は、 の代表作『レ・ミゼラブル』のクライマックスを飾っている。

その後、1848年には二月革命が起って七月王政が打倒された。その中心を担ったのは学生や労働者を含む民衆であった。二月革命を経て、フランス革命期以来となる男子普通選挙が実施され、第二共和政が成立した。この二月革命ならびに第二共和政は、当時発展していた社会主義思想の影響を受けている。社会主義者である

[G] が二月革命後の臨時政府に入閣し、国立作業所の設置を進めたのはその一例といえよう。この第二共和政はナポレオン3世の皇帝即位によって数年で崩壊してしまっただが、そのナポレオン3世も社会主義者 [H] の影響を強く受け、「馬上の [H] 」と称された。さらに、ヨーロッパ各地の民族運動にも二月革命は大きな影響を与え、北イタリアでは [I] 王国がオーストリアに宣戦し、ハンガリーでは [J] が独立運動を指導した。

この後、フランスの歴史において民衆蜂起などの動きはあったが、「革命」と称される出来事が起こるのは、1940年の第二次世界大戦中のことである。フランスがドイツの侵攻を受けると、[K] がドイツと休戦協定を結びヴィシー政府を樹立した。国家主席となった [K] は、「労働・家族・祖国」をスローガンに権威主義体制の樹立を目指す「国民革命」を提唱した。ヴィシー政府は対独協力を進める政府ではあったが、こうした試みは必ずしもドイツから押し付けられたものではなかった。すでに、フランスでも1930年代からファシズム勢力が伸長しており、⁽²⁾ [K] を熱狂的に歓迎するフランス人も少なくなかった。しかし、ド=ゴール率いる自由フランス政府がパリを解放しヴィシー政府を崩壊させると、この時代の記憶は多くのフランス人の間で封印されることになる。

そのド=ゴールが大統領を務めていた1968年には、パリの大学生を中心とする学生運動から発展した抗議運動が起こった。この抗議運動は五月革命とも呼ばれる。当時、世界的に広がりを見せていたベトナム反戦運動に携わった学生の逮捕をきっかけとして、学生たちと警官隊との衝突が繰り返された。その結果、運動は規模を拡大し、大学や劇場の占拠、ついには労働者を巻き込んだゼネストへと発展していった。ただし、これまでの革命とは違って、五月革命に参加した若者たちは、個人の自立や権力の否定⁽³⁾を唱える一方で、政治変革といった明確な目標を有していたわけではなかった。1968年6月に行われた総選挙でド=ゴール派が圧勝したのはそのためであろう。

フランスで学生運動が盛んになった1968年、米国やドイツや日本でも学生運動が盛んとなり、チェコスロヴァキアでは同国共産党第一書記の [L] が「プラハの春」と呼ばれる政治改革を進めていた。五月革命はこれまでの革命のように政治体制を変えることはなかったが、新時代の呼び水となったことは確かである。

- 〔1〕 「人権宣言」を不十分として『女性の権利宣言』を執筆した後、1793年に処刑された人物は誰か。
- 〔2〕 1936年、ファシズム勢力に対抗する目的で社会党・急進社会党・共産党が手を組みブルムを首相とする内閣が成立した。この内閣を何内閣というか、漢字で記せ。
- 〔3〕 こうした若者の主張は当時の知識人にも支持された。そのような知識人中で、『存在と無』を著し実存主義を唱えたことで知られる人物は誰か。